

伝えてくれます。

私は今もって一人で、野菜作りや大好きな花作りをして楽しく余生を送っています。八十八歳の私はまだまだ元気です、平和な日本を願って毎日を過ごしています。

日本に住んでいる瀋陽人

群馬県 星野 満彦

はじめに

私の父末雄は、昭和五（一九三〇）年一月に、当時高崎にあった陸軍歩兵第十五連隊に現役兵として入隊し、昭和八年には満州国の治安維持の任務に就くために動員された連隊主力の一員として渡満して、軍務に精励していた。昭和十年に現地除隊となったが、服務成績が優秀であったので、連隊長の推薦により、そのころ満州国の花形企業であった南満州鉄道株式会社（通称・満鉄）に入

社した。翌年になって世話をしてくれる人があり、郷里の道子と結婚し、長男の私をはじめとして昭子、和子、節子という三人の妹を次々に出産し、親子六人家族で平和で温かい家庭生活を送っていた。

昭和十六年の冬に起きた大東亜戦争も、緒戦の華やかな戦局から、だんだんと厳しさを増してきた。昭和二十年になると敗色濃厚となってきた。そのような情勢となった七月には、心配していた父にも召集令状がきて、現地の部隊に入隊させられた。そして、八月の終戦によって多くの兵隊と共にシベリアに送られ、苛酷な労働に従事させられていたが、昭和二十三年、抑留生活から解放されて、妻子の消息を知るよしも無く出身地の群馬に復員した。

召集当時の父は、熱河省承德市の満鉄事務所勤務していたので、私たち一家は承德市街から少し外れた満鉄社宅に住んでいて、そのまま親子五人が残ってしまった。

当時八歳だった私は、あの八月十五日の前後の情勢や身の回りの出来事や、さらには大人たちの思いなどはあまりよく分からずに、ただ態勢の赴くままに流れの中にただよっていて、大人の考えていたことなどは知ることができなかった。ただ、自分の周りで起きたこと、私が直接に体験したことは鮮明に記憶の中に残っていて、例えばその量は大人の体験したことと同じぐらいあると思っている。

その強烈にして鮮明に、脳裡にある体験を記して、平和ということがいかに有り難いことであるかを、後世の人々に書き残したいと思つて、私の引揚労苦記録をまとめた。

一 虐殺

八月九日、ソ連軍の突如とした不法侵攻による戦渦は、瞬く間にここ承德にも及んできて、私たち承德在留の日本人もここから避難することとなり、貨物列車で止まったり、動いたりを繰り返しながらの避難行動が続いていた。列車が止まると

いつでも各駅で停車するというのではなく、運転士が握らされた金によって、物売りのいる満人のところに止まるのであった。いったん止まると、今度は列車に乗っている避難民の人たちが金目の物を渡すまでは、煙草をふかしたり居眠りをしたりして、一向に動かさそうとする気配を示さなかった。

そんなことの繰り返しで、日が経つにつれて満人の私たち日本人に対する感情が次第に露骨になり、悪化してきた。だがそれよりも恐れていたことは、ソ連軍が追いついて来るのではないかという思いだった。

いつ動くか分からない無計画な列車のために、大人たちは子供を車外に出すことができずに、大便や小便は車内での垂れ流しで、雨が降ると黄色い汚水が膝から腰へと上がってきた。夜は冷たい風が強く吹きつけるし、昼間は強い真夏の日差しが頭の上から降り注ぐので、晴天が数日続くと日射病で倒れる人が続出した。

食べ物を買うことのできなかった人や体力の無い病人は、うわごとを言い出したり突如として騒ぎ出したり、さらには口から泡を吹き痙攣を起こして倒れる人も増えてきた。しかし、倒れるといてもすし詰めは無蓋貨車の中のこと。みんなに押されて吊るされたかっこうのまま死んでいた。それを周りの人が力を合わせて、走っている列車から外に放り出すという有様であった。母は口癖のように「満彦！　しゃがんでしまったら踏み潰されて、死んでしまうよ！」と、繰り返し言っていたが、胃腸の弱い私は眠ると体がだんだんと沈んでしまうので、鉄骨の柱に肩掛けかばんを引っ掛け、そこに腕を通して、ぶら下がっていた。腕がしびれてきて苦しかったが、これ以外に安全を保つ方法が無かった。

無蓋貨車の柵が高かったので外を見ることができず、時々母に尻を押してもらって鉄骨をよじ登り景色を見たが、鉄橋の両端には必ずレンガ造りのトーチカがあったのが印象的であった。それ以外

外は見渡す限り山も人家もなく、もちろん人も動物も見えず、まったくの大平原という感じで、太陽は地平線から昇り地平線に沈んでいった。

私の隣に立っていた三歳の秋ちゃんという子が死んで何日か経ったころ、朝日が貨車の縁を金色に染め始めると、列車は雑草の生い茂る草原の中で止まった。「また例のことか！」と、運転士のがめつきにみんなで愚痴ったが、この日が多くの人の命日になろうとは、だれも思わなかった。しばらくすると運転士と助手が回って来て、「全員降りなさい！　この列車は戻るよ」と、怒鳴って歩いた。みんなはぶつぶつ言いながらも、降りざるを得なかった。いつもは群がって来る満人の物売りもいない。運転士は車内に乗っている者がいないことを確かめると、汽笛を数回鳴らして戻って行った。

承德を出てから初めて大地に降りたが、土がこんなに軟らかく、そして温かかったのかと感じた。鉄板の上での数十日間の生活から解放された

私たちは、大人の気持ちも察せずに走り回っていた。「鉄橋が壊されているんだってよ!」と、小母さんたちが話し合っていた。雑草を透かして見ると、大きな河が見える。辺り一面には秋の草花が咲いているが、その中に鈴蘭に似て真っ直ぐに伸びていて周りに緑色の綱をかぶったような花を初めて見た。

ほとんどの人が河原に行ったが、その広い河原は砂と小石が一面にあり、河の水は濁っていて流れていないようだった。しばらくすると、トラックが二、三十台走ってきて河原に止まったが、そこから降りて来たのは、初めて見るソ連兵だった。「何をしに来たのでしょうね!」と、母は近くの人たちと話していた。「運転士の野郎が言いつけたのさ。散々私たちから金を巻き上げておいて、用がなくなるとソ連兵に売りやがって!」と、吐き捨てるように言う人もいた。母はリュックサックを背負い、その上に一番下の妹節子に乗せると、おぶり紐をいつもよりもしっかりと縛っ

た。

トラックはみんなの前で次々と停止し、ソ連兵が飛び降りて来て、私たちを並ばせて点呼をとった。その間、トラックは大きな音を立てて動き回っていたが、そのうちに河原にきて止まった。先ほどから、五十歳ぐらいの小母さんがソ連兵に呼びつけられて言い合っていたが、やがてソ連兵から拡声器を渡されると、私たちに向かって「河原の水際に沿って一列に並ぶように!」と言い、隣の人との間隔を五メートルずつあけるように片手を大きく上げて示した。みんなは言われるとおりに並んだが、両端ははるかに向こうで見えなくなっていた。ソ連兵も拡声器を持ち出して、わけの分からないことを怒鳴っていた。「こっちは大勢の日本人がいるんだし、母だっているんだ!」と思うと、私は少しも怖くなかった。足もとの小石の下では、何ごとも無いかのごとくに、コロコロギが鳴いていた。太陽はいつの間にか真上を過ぎて、西に傾いていた。ソ連兵が動くたびに、照り

返した銃剣があちこちできらきらしていた。

そのうちに、全員河に入るようと命令された。一斉に河に向かって進むと、大人の腰の辺りの深さになったところで「止まれ！」の号令がかかった。母の顔を何となく見上げたら、母の背がとても高く見えた。後ろでソ連兵の太い怒鳴り声が聞こえた。それは、親子も別々に離れて立つようになると、おおげさな身振りで指示していた。文句を言ったり雑談したりする人も見当たらなくなり、辺りは静まり返ってきて、ソ連兵の声と銃や剣のふれ合う音、それに河の音だけが耳に入ってきた。大人たちの顔にも、表情がなくなってきた。

一段と大きな声を出して叫んでいるソ連兵がいたので振り返ると、一人のソ連兵が母に向かって「子供の手を離せ！」というようなことを、身振り手振りで怒鳴っていた。私はびっくりして、かえって反射的に母の手を強くつかんで母を見上げながら、母は口を半開きにしたまま遠くの空を見つ

めていた。ソ連兵の怒鳴り声が聞こえないのだからかと、心配になった。母は右手で私をしっかりとつかみ、左手には七歳の和子の手を握っていた。背中に背負ったリュックサックの上には節子がいしたが、そのままの状態で三十分以上もたっていた。

突然、上流側で銃声が響いた。しばらくして、再び数発の銃声、だれも動く者はいないし、声を出す者もいなかった。母は「ソ連兵の弾なんか当たっても痛くないから、じっとしていなさいよ」と、小声で言った。黄色に染まっている河水が、ひとときわ色を濃くして私たちの周りを囲むようにして流れていた。向こう岸には満人が数人立ち止まって、こちらの様子を見ているのが、とても遠くのこのように見られた。そのうちに、溶けきらない血が油のように波紋をつくりながら、ゆっくりと近づいてきた。そして一緒に流れてきた死体が、私の肩に引っかけた。これから右に行こうか、左に行こうかと行き先をさぐるように大き

く揺れていた。私は体を動かしたが、母は握っている手に力を加えて、「静かにしていなさい！」というゼスチャーを示していた。死体は、私のそばで半回転してからゆっくりと離れていったが、上着ともんぺの一部分は風船のように膨らんでいて、いつまでも見えていた。

黄色く濁っている河水は、溶けきった血ですっかり赤くなっていた。死体の近くは、流れ出る血でひととき濃く縞模様ができて、立っている私たちの体にまつわり付いていた。

「母さん！ どうしたの？ 何かあったの！」と、和子が小声で聞いている。私はこの時点では、「もうだめだ！」とは思っていなかったし、母のそばにおれば、大丈夫と信じていた。だが、その後のことは記憶が薄らいできて、「しゃがむと死ぬよ！」と言うだれかの声を遠くでの声のように聞いたまま、気が遠くなった。

私が気がついたときは、片腕を強く引っぱられて水の中であえいでいた。周りでは、泣きわめい

ている人の声だけが強く聞こえていた。私は、何回も水の中に顔を洗ってはもがいていたが、そのうちに何とか自分の力で立って歩こうとしていた。一瞬、周りを見ると人、人、人の渦巻だけが目に入った。銃で撃たれて崩れるようにして沈んでいった女の人、その腕から離れて泣き叫びながら流される子供、頭から流れ出す脳漿を手で止めようとしている老人、それを突き飛ばして前に進もうとする人、これこそ阿鼻叫喚、地獄絵というのであろうと、あとに思ったことである。

ソ連兵の幾人かが先回りをして、逃げまどう人々を狙い撃ちしたり、真正面から銃剣で突き刺したりしていた。深手を負ってもがいている人は、気が狂ったように叫びながら河中で暴れ回っていた。その周囲には真っ赤な波紋が幾重にも渦巻いていたことを今でも鮮明に思い出す。私の前を逃げて行く親子にソ連兵が追い付き、幼児の顔に向けて銃剣を突き出した。銃剣が幼児の頬の肉を削ぎ取り頬骨で滑った先が、母がしっかりと

握っている私の右手首をきつとかすめた。三センチメートルぐらいの長さに切り口が開き、肉が見えたが、どうしたわけか血は出てこないし痛くなかった。それと同時に、このソ連兵はどうしてか、大きな水しぶきをあげて私の足もとに引っくり返った。

母は、早くここから離れようとして急いでいる様子だった。前を見ると私たちの進んで行く数メートル前に、別のソ連兵が同じように銃剣を構えて向かっていて、その前を逃げまどう親子連れの三人がいた。母は、その人に気付かないようだったので「母さん！ こっち、こっち」と言って、私は力いっぱい母の手を引いた。

二 顔の上に鳥が止まっているよ！

それからどのくらい経ったのか分らないし、何も覚えていない。気が付いたら、私と和子は裸になったまま河原に座っていた。周りには、衣類やリュックサックに詰め込んでいた物が散乱していて、水鳥がずうずうしく近づいてきては、それ

らをつついていて、母がそれを見ては石を投げて追い払っていた。母は干してある手拭いを拾い上げると、引き裂いていたが、その顔はいつもと違って無表情だった。私も和子も何の感情も無く、ただぼかんとして母の手もとを見ているだけだった。そのうちに母は私の右手をつかんで、手首の傷口をのぞいた。傷口は長さ約三センチメートルぐらいで、口は開き肉が見えているが、こんな深手なのに血は出ていなかった。母は、持っていた脱脂綿に赤チンキをふくませて傷口を消毒してくれたが、傷口の中にまではとどかないので、脱脂綿をしぼって赤チンキを垂らし込んだ。その都度冷たさを感じたが、痛みはなかった。顔を上げて河面の方を見たら、水面に夕陽が映りきらきらと瞬いていた。その中に幾つかの人影が動いていた。怪我をしているのだろうか？ 片手で頭や手や足を縛っている人、座ったまま空に向かって大きく口を動かしている人、河に入って行く人と、それを押し留めようとしている人、いろいろ

な人が見えたが、みんな大きな声を出し合い、怒鳴り合っているようだったが、私の耳には何も聞こえず、ただ母の息づかいと、手首を縛るときの布の擦れる音だけが聞こえていた。

時間が経つにつれてだんだんと頭の中もしっかりしてきて、銃剣で切られた前後のことがよみがえってきた。「そうだ！ あのあとソ連兵は私たちを銃剣で突いて回ったんだ」ソ連兵の幾人かは、水の中を先回りして逃げまどう人たちを正面から銃剣で突き刺した。突き刺した銃剣を引き抜くときの着衣の引き裂かれる音、それに交差し、刺された銃剣にしがみついて泣き叫んでいる母親の声などがよみがえってきた。「そうだ！」深手を負わされてもまだ死に切れずに、水しぶきをあげて暴れ回る子供のことが思い出された。次いで、その周囲は真っ赤な血の波紋が、幾重にも渦巻いていたことが頭に浮かんできた。あの河中での場面が次々とよみがえってきた。さらに前後の状況を思い浮かべようと記憶をよみがえらせよ

うとしていると、「はい、一丁あがり！ さあもういいよ！」という元気な母の声が響いた。その声は今までの母の声に戻っていた。

ずきんと腕が痛んで思わず肩を下げたが、母は手拭いで縛った私の手首を上からたたいた。「あのソ連兵は、赤ん坊の顔を突き刺したんだ！ ちきしょう！」と声を荒立てて言いながら、母の顔を見た。母は、かすかな笑顔を浮かべたまま遠くを見ていた。

夕日の映える河向こうでは、何かが動いていた。巻きあがる砂煙が、あたかも野火が漂うごとくに数百メートルに渡って流れていた。それを見た瞬間に、私は合点がきた。「そうか、ソ連兵のトラックが引き上げて行くところなのか！」

あそこで一列に並ばされて河の中に入れられた千人あまりの人たちはどうしたのだろうか。この対岸の岸にたどり着いた人は、どんなに多くても五十人ぐらいしか見当たらないが、残りの人は河を渡りきれなかったのか？ 九百人以上の人が、

この河の中で消えたんだ。だが、ソ連兵の前で死んだ人はそんなに多くはなかったはずだ。銃で撃たれて傷ついても、銃剣で刺されて血が噴き出て、みんなは叫びながら河の中を動き回っていたのだから、怪我を負わされただけなのに、それなのに今、ここから見える人影は数えられるくらいしかない。どうしたことかと、疑問は疑問を生み出していた。

「満彦、さあ行こうか。和子も立ちなさい」という母の力強い声に立ち上がったが、私は「だって、みんなが来ないよ！」と反発した。母は再び強い言葉で、「満彦が歩き出さなければ、あの私たちは動かないんだよ！」と言った。母の言うことが、私には理解できなかった。私は疲れていて動きたくないのに、他の人より先に歩き出すのは、損をするような気がしてならなかった。

だが、母の思いは別だった。肉親を失った人たちは、この場所から離れることは随分とつらいことである。私の家族は、幸運にも誰も欠けること

なく全員が助かったのだから、私たちが先に出発しなければ、あとの人々は誰も腰を上げないだろうと母は考えたのだった。後々にそのように母は話していた。

十分ぐらい高梁畑の中を歩いてしたが、みんなはそこで立ち止まってしまった。暗くなり、歩く目標としていた遠くの山が見えなくなったからだ。遅れて歩く人もいたので、これ以上に進むのは無理だということになった。大人たちは集まって相談を始めたが、お互いに顔も知らない初めて会う人が多いので、なかなか話がまとまらなかった。

遅れて歩いていた人々が、ぽつぽつと私たちのところを通って行った。怪我をしている人がほとんどで、歩き方も速さもまちまちだった。陽が沈むと急に寒さがやってきた。息を強く吐き出すと、口先に薄い水滴がすぐにできる。昼間は三十度ぐらいあるのに、夜になると零下七、八度になつてしまう。

結局、その夜はそこで野宿をすることに決まった。母は怪我をしている人に近寄り、濡れた服を脱がせて、それを高梁の幹にかけて手拭いでその人の体をこすって、自分のリュックサックから乾いた下着を取り出し、子供にしてやるように話しかけながら着せていた。食べる物は何も無いので、空腹でみんなはぐったりしていたが、母はみんなになるだけまとまって眠るように呼び掛け、さらに「濡れている物は脱ぎなさい。着替えのない人は高梁の葉をたくさん取って下着の間に詰めると温かいですよ!」と言っていた。だが、そうすることはよい方法だと分かっている、誰も動く気配はなかった。母はいつまでも小声で話しかけて、気持ちを奮い起こしていた。私は寝てしまったが、母の声はいつまでも聞こえていた。

ふと目が開くと、高梁の葉から濡れる朝日がちらちらと揺れていた。母は私の横で座ったまま、周りで寝ている人たちをぼんやりと見ている。私の横で寝ている小母さんは、大きなあくび

をしていたが、それが治まると浅くて小さな呼吸を繰り返しながら、動かなくなっていた。私は頭を起こして母の腕を揺すったら、「疲れたんだって!」と、母はぼつりと一言、小さな声で言った。疲れただけで死ぬなんて、そんなことがあるものか、そんな話は聞いたこともないと、私は考えながら周囲を見回したが、みんなやせて頬骨だけが出ている。しかしその顔には、ほっとしたような安堵の色が浮き出ている、目を閉じていた。たった数時間の河越で、こんなにも人を変えてしまったのかと、子供心にも痛烈な印象を与えた。そんなはずはない。起き上がればあの賑やかさは取り戻すだろうとも思った。

「さあ! 出発だ」と、遠くの方で男の人の声がすると、あちらこちらで高梁の穂先が揺れ出した。朝焼け雲の下を鳥がたくさん飛び交っている。「母さん! まだ寝ている人がたくさんいるよ」と、私は母を見上げて言ったが、母はそれには答えずに、「これからは、あそこにいるお爺さ

んの言うとおりにするのよ。班長さんだから」と言った。半分ぐらいの人が、重たい腰を上げて動き出した。私も和子も、母に遅れないように歩き始めたが、しばらく歩いているうちに、私は寝かせたまま置き去りにした人たちのことが気になって、後ろを振り返った。「母さん！ あの人たちはどうなるの？」と母に言ったら、「疲れたから、しばらく休ませてくれて言っているの！ 満彦、もう振り返るんじゃないよ」「でも、寝ている人の顔の上に鳥が止まっているよ！ 母さん、母さん！ 聞いているの？」と、さらに母に問いつめたが、それにも返事がなかった。

三 蛆虫の住み家

悲惨な行進が続いていた。一緒に歩いてきた顔見知りの承子姉ちゃんの腕の傷口に、蛆虫がわいてきた。「いくわよ、もうすぐに終わるからね！ 我慢してよ」と言う母の真剣な顔。口の両端が震えていた。ピンセットを持って蛆虫を狙っているのだが、承子姉ちゃんが痛がっているので、遠慮

しながら狙っている。ピンセットの先端が蛆虫に触れる度に、蛆虫は体をくねらせては、素早く膿みだらけの傷口の中に逃げ込んでしまう。このときが一番痛いとのことだった。母は、膿の中にピンセットを入れて蛆虫を探すが、蛆虫もさる者で膿の中に深く潜り込むので、なかなか見つからない。人間と蛆虫の根比べのようなものだった。しばらく待っていると蛆虫の背中が見えてきたが、その数ざっと五十匹以上もあったようだった。一匹を正確にピンセットの先端でつかまえたが、その途端に他は再び膿の中に潜ってしまった。こんな悪戦苦闘の末に摘み出したのはたった五匹、承子姉ちゃんの目からは涙がこぼれ落ちてきた。「小田さん、もういいからほっておいてください」と涙声で言っている。それを聞いた母は、しっかりと握っていた左手をゆるめた。これで止めるのかと思つて母の顔を見ると、母はすました顔をして左手を右手に握り替えて、「ちよつと体の向きを変えてちょうだい」と言いながら傷口を下に向

けると、傷口と反対側の腕のところをたたきはじめた。頭に来た母は、一気に蛆虫全部をたたき出そうとしたのだった。でも腕は大きく揺れるのだが、蛆虫は一匹も落ちてこなかった。それどころか、蛆虫の隠れ蓑となっている膿も落ちてはこなかった。この試みは失敗にみえたが、このときに意外な発見をした。腕に小さな振動を数多く与えると、蛆虫は尻の方からもぞもぞと出てきたのだ。はじめのうちは、蛆虫の尻が見える度にピンセットで摘み出していた母も、そのうちにたたくことだけをしていた。蛆虫は自分で後ろずさりをするしながら、ぽとぽと落ちてきた。承子姉ちゃんは、蛆虫が肉を食いちぎるときの痛みから解放されて、ほっとした顔になって落ちている蛆虫を無表情に見ていた。母は、「よく頑張ったわね。もう大丈夫だからね」と言って、オキシフルで消毒をして手拭いを半分に引き裂いて、傷口に当てて手当を終えた。「一丁あがり！」と言って手を放した。承子姉ちゃんは、「小田さんありがとうご

ざいました」と、涙をぼろっと落として礼を言ったが、次いで力無い言葉で、「あの！ 母さんも、お婆ちゃんも、妹の節ちゃんも、そして病気の父さんも！」と言った。ただそれだけだったが、随分とつらい思いをしたのだろうと私は思った。

母はちょっと声を大きくして、「承子さん、私 が今一番心配しているのは、あなたのことなんですよ、他のお話はあなたが元気になってから聞きましょう。それはそうとして怪我はここだけだったの」と言うと、「足のところをちょっと」と答えた。母は、承子姉ちゃんのもんぺを半分ずり下げたら、股の付け根の部分が、ざわざわと動いた。ここにも蛆虫がいた。二十センチメートル四方の膿の池の中に数百匹と思われる蛆虫が蠢いていた。今度は、母の顔にも余裕があった。

「さっきの要領で、もう一丁やるか。腹ばいになって右足を浮かせて」と言って前の要領でたたき出したが、今度はうまくいかなかった。お尻をたたいても、震動が傷口に伝わらないのだった。

母は、思い切って傷口の膿を布で吸い取りはじめた。何回も何回も繰り返しているうちに、肉に食い込んだ数百匹の蛆虫の尻だけになった。母は、傷口にオキシフルと赤チンキを半分ずつ流し込んだ。真つ赤な蛆虫がオキシフルの中でもがきはじめた。承子姉ちゃんは腰をひねって蛆虫を一気に流し出そうとしたが、母は承子姉ちゃんのお尻を押さえて止めた。「承子さん、今傷口の薬を捨ててしまうと、残った蛆虫が中に入ってしまうですよ。しばらく薬の中で泳がせておきなさい。そのうちに自分から外に出てきて落ちるからね」と少し乱暴なようなことだったが、母にすればこれが最後の一発勝負でもあったのだろう。少し残った小瓶の薬は、今後のために残しておかなければならなかった。

間もなく、承子姉ちゃんは痛みが薄れてきたのか、私に向かって話しかけてきた。「こら彦っぺ。お姉ちゃんの秘密を知っただろう！」と言ったので、「いや、何にも見てないよ。そうだと足を

ちょっと見たけれど、それとあの…」と返事をした。「姉ちゃんの言いたいことは、涙を流したと、声を出して泣いたこと。おい彦っぺ、絶対に人には言うなよ。姉ちゃんの誇りが傷つくからな！」と言うほど元気になっていた。

母は残り少なくなったオキシフルを脱脂綿に含ませると、高粱畑の中に転がって蛆虫だらけになっている人の口の周りや、傷口の周りを拭いていた。もう二時間ぐらいいもこんなことをしていたのだ。暗くなった畑の中から、「ほら、水だよ。いっぱい飲みなさい。ほら水だよ」という母の言葉だけが響いていた。水なんかどこにも無いのに、母はそう言って励ましていた。

夜中に、承子姉ちゃんがうわごとで何か言ったので、私が頭を上げると、承子姉ちゃんのははとしたように気を取り戻して、「彦っぺ、姉ちゃんは何か言っていたか？」と言いながら右手で私に何かを渡そうとしたので、私はその手を握ったが手の中には何も無かった。私はなんだか分からない

いままに、その手を胸元に戻した。それからの私は、寝転んだまま夜空を見ていた。月も星もきれいで静かな夜空だった。

どこかで苦しそうな声がしたので、ふと目を覚ました。月の前を素早く横切る真っ黒な雲と、高粱畑をざわざわと過ぎる強い風の音だけだった。気が付いて承子姉ちゃんの方を見たが、静かな寝息を立てていた。白い足と白い腕が、月の光に映えていた。

「満彦！ 起きなさい」と母の声に飛び起きた。母は承子姉ちゃんのシャツを脱がせると、それを頭の上から被せて紐で縛っている。私はびっくりしたが、母は人差し指を口に当てて、「このことは、和子には内緒だよ。あそこの草むらがいいだらう。さあ足を持って」と私に言った。私は「承子姉ちゃんは、さっき生きていたよ。話をしたもん！」と母に言ったが、母は聞いてはいなかった。

四 美代子の首を切ったの！

昭和二十一年の五月には、奉天（瀋陽）で避難生活を送っていた。

洗面器に砂を入れ、その真ん中に灰を入れて即製の火鉢を作った。私は、七輪で燻した石炭の火種をそこに移すと、その上に石炭を乗せて口をとがらせながら吹き、火勢を増していた。妹の和子は、敏子小母さんが来たので、餅粟のご飯と味噌汁を作るのだと言って張り切って野菜を刻んでいた。母は、小母さんの汚れた着物を外で洗濯している。部屋の中は一本のろうそくでも、隅々に光が行き渡り明るかった。

敏子小母さんは毛布にくるまり、擦り切れた畳の上で膝を抱えてじっとしていた。私は、いつものように三個の石を部屋の真ん中に置き、その上に即製火鉢を乗せて何回か揺すって座り具合を確かめた。母が洗濯物を持って戻ると、和子は七輪に乗せている鍋の蓋を取って、「母さん、水加減はこれでいいの」と聞いた。いつもより一人分多

く炊くので、炊事係の和子は心配そうであった。母はちょっと鍋をのぞくと首を縦に振ったので、和子はすぐに蓋をした。白い湯気が鍋の上に残ったが、裏口の戸のすき間から入ってくる風で大きく揺れると、一瞬のうちに部屋の中にはおいしい餅粟の匂いが満ちていた。

「あとは、母さんがするから」と言うので、和子は火鉢のそばに座った。私は母から受け取った洗濯物を広げると、小母さんと和子はその両端を持って、三人で火の上にかざした。三人共、無言であった。その洗濯物は、濃い青色の地に白い小さな花模様が散らばっていたが、背中の部分は擦り切れて穴があいていた。それを見た私は、学校の裏のごみ焼却炉の横に埋めてきた敏子小母さんの赤ちゃんのことを急に思い出した。赤ちゃんの体は、着ている物で覆われた部分は腐っていて膿で濡れていたが、空気に触れていた顔は干涸らびていて、目と鼻が分からないほどしわだらけだった。腐って抜け落ちた下半身は、どこにいったか

分らない。一緒に歩いてきた人たちも気が付かなかったのかと思った。そんなことが頭の中をよぎった。

「さあ！ ご飯だよ」と母が盛り付けると、和子が風呂敷を畳の上に広げて、漬け物とご飯と味噌汁を並べた。破れた畳表の下からわら屑が飛び出して、風呂敷の隅を持ち上げていた。「すまないね。道子さん」と、敏子小母さんがやつれた顔を一層しわくちゃにして一言口を開いた。母は私たちに向かって、「この小母さんは、昔母さんが奉天にいたときのお友達なんだよ」と言って、ほほえみを浮かべた顔で小母さんを見た。

小母さんはせわしげにまばたきをすると、膝を抱えたまま体を前後に揺すりはじめた。若くて張り切っていたころのことを思い出しているようだった。食事をしながら、適宜に話をする母の上手な誘いに乗って、小母さんも少しずつ元氣を取り戻してきて、うなずいたり笑みを浮かべたり答えたりしていたが、そのうち自分からも楽しかつ

たことや面白かったことなどの思い出を話し始めた。その話の大部分は、奉天で零下三十度になったころの生活の話だった。母がお湯を注ぐと、みんなは茶碗を両手で抱えて熱い湯をすすり、久しぶりに楽しい夕食を過ごした。そしてこんな楽しい時間が、明日もその次の日もまたその次の日も、と永遠に続くような和らいだ気持ちになっていた。食事のあとも、四人でローソクの明かりを囲んで話し込んでいた。

母が、「ところで子供は一人だったの?」と聞いた。私が指先で丸めて火の中に落としたりした糸屑が、ちりちりと音を出して丸まった。小母さんは一瞬顔を曇らしたが、すぐに元に戻って、「真一のほかにも、三歳になった美代子と八歳の弓子がいんです」「そう、敏子さんも苦労したわね。差し支えなかったら話してくれない」と、母は真剣な眼差しと柔らかい微笑みを見せて小母さんに言った。小母さんも心がほぐれたのか、考えながらぼつりぼつりと話し始めた。その目は空間を見

つめていたが、曇ってはいなかった。「…そしてね。人からもらったカミソリで美代子の喉を切ったの。美代子は私の手から抜け出して走って行ったのよ。そして『お母さん! いい子になるから痛くしないで』と遠くから泣いて叫んでいたの。

暴民は目の前に迫っているでしょう。早く何とかしなければと、気ばかり急いでいたの。もう何もしないからと言って両手を出して近づこうとするけれど、美代子は逃げて行き、建物の陰から顔だけを出しては、『いい子になるから! いい子になるから!』と言って泣いていた」と、小母さんはかみしめるような言葉で話し出した。消えそうになったローソクの上に新しいローソクを足したが、安定しないのか明るくなったり消えそうになったりした。母の顔も、優しく見えたり怖く見えたりした。

「そうしたら、美代子の近くにいた奥さんが見かねてか、後ろから紐で首を締めてくれたんです。私は『手をゆるめないで!』と、奥さんに叫

びながら走って行って、美代子をしっかりと抱きしめたの！」と、小母さんは真剣になって話を続けていたが、急に顔を和らげると母の方をちらりと見て、すまなさそうな顔を見せた。子供の私たちに余分な話を聞かせてしまったという気持ちからだろう。和子は目を見開いたまま、まばたきもせず聞き入っていた。私も、それからどうなっていくのかと気になって、小母さんの次の言葉を待っていた。だが、母は話を変えてしまった。

「それで、弓子ちゃんの方はどうしたの？」と言いながら、指先で畳の上をたたいていた。「暴民の数が多くなってね！ 弾がビュンビュンと飛んでくるでしょう。逃げ場を失った私たちは、暴民が飛び込んで来る前にみんなで死のうと約束したの。そのとき班長が怖い顔をしてね。『頑張るんだ！ 勝手な行動はするな！』ってね。だからみんなで励まし合ったのよ。泣きながらね！ でもね、最後は班長の合図でみんな自殺を急いだの。そしてね！」と、小母さんはまた話を止めてひと

息ついていた。

和子は待ちきれずに小母さんに話しかけて、「じきつってどんなこと？」と聞いていた。無煙炭の青白い炎の上に薄い煙が揺れていた。小母さんはちよつとためらいを見せたあとに、和子の方に体を向けて、「あのね、太い棒で頭をたたいてもらったのよ。みんな一列になって順番を待ってね」。母は、小母さんの話を打ち消すように、声を少し大きくして「それで、弓子ちゃんは？」と言った。

「あっ、そうそう弓子のことね？ 弓子は私がよく言って聞かせると、『うん、うん』とうなずいていたわ。どうにもならない今の様子をよく飲み込んでいたみたいだったわ。八歳だものね。母さんには弓子を殺せないって言うのと、弓子は一人で、班長のいる自殺場の方に歩いて行ったの。あの子ったらバカみたいに手を振っていた」と、小母さんの話は嗚咽の声になっていた。

みんなして引っ張って火鉢にかざしていた小母

さんの着物が全部乾いたので、母はそれを小母さんに渡しながら、「今夜はもう寝よう。明日また話の続きを聞かせてね」と言った。二枚しかない毛布に、みんなでくるまって寝た。小母さんのやせた肘が私の手首の上に乗っていたので痛かった。

翌日早く目が覚めたが、もう小母さんはそこにはいなかった。「お墓に行っているのでしょうか。そのうちに戻って来るよ」と、母はぼつりと言った。朝食が終わると、母と私は仕事に出掛けた。昨夜の寒さが嘘のように暖かい日差だった。夕方仕事から帰って来ると、家の中は静かだった。小母さんは、他の人と一緒に違う場所に移ったのだろうかと考えた。ローソクを囲んで黙ったままの夕食が済むと、明日のコロッケ売りの用意を始めた。そばにいた和子が、ぼつりと「母さん！朝掃除をしていたらこんなものが落ちていたよ」と言っ、薄いガラスの破片のようなものを見せた。母はローソクの炎にかざして見ていたが、和

子に戻しながら「小母さんのものだよ」と言った。「どうして分かるの」と私は不思議に思っ、聞いた。母は忙しそうにコロッケを丸めながら、「だって！ 赤ちゃんの爪でしょう」。ローソクの炎が揺れて、壁に映った四人の影が大きくよるめいた。ソ満国境から約千五百キロメートルの道程を、死んだ赤ん坊を背負ってやっと奉天にたどり着いた敏子小母さん、その着物の縫い目の中に潜り込んでいたのだろうか。母さんがよく洗ったのに。「きっと、死んでも母さんの背中にしがみ付いていたんだね」と私が言うと、和子も、「兄ちゃんもそう思う？」と答えた。

五 母との別れ

あれからもいろいろな苦労があったが、何とか生きて日本に引き揚げて来た。それからの生活も並大抵なことではなかったが、父の実家がある群馬県の渋川で、無事にシベリア抑留から帰還した父を迎えて生活再建を図って、家族一同力をあわせて努力した。

昭和五十五年十一月二十八日、入院していた母の容態が急変し、私は急いで病室に駆け付けた。母は私の様子を見て、「何を慌てているの？」ドアの開け方がいつもと違うじゃないの」と、にっこり笑いながら言った。「いや、何でもないけれど。今日は昼間用事があるので朝のうちにと思っただけ」「そんなに心配しなくてもいいよ。病院から連絡が行ったんだらう。さっきちょっと気分が悪くなっただけだよ。もう大丈夫だから早く保育園に戻りなさい。子供や先生が待っているでしょう」と言うので、病室から出た。帰りに病院側から、容態が最悪なので付き添うようにと言われ、私は母が気を使うといけないので、空きベッドに寝転がって本を読んでいた。そのうちに、前から気にかけていたことを思い出して聞いてみた。「母さん、起きていますか？」「何だい」私は、「満州から引き揚げてきてから間もなくのころだけど、僕が飲もうとしたお茶に、茶柱が立ったのを覚えている？」。母は、「さあ、ね！」と言って返事を

はぐらかした。「あのとき僕が大声を出したものだから、みんなが集まって来て茶碗をのぞき込んだ。茶柱の倒れた方向から父さんが帰って来ると言っただけ、みんな真剣になって見ていた。母さんもしばらくはのぞいていたが、いきなり茶碗を取り上げて、いつきに飲んでしまった。僕はびっくりしたが、そのときは黙っていた」と当時のことを話したが、母は「さあ、覚えていないね。あのときの母さんの気持ちは今も同じさ。多分、父さんの倒れるのを見るのがつらかったんだと思うよ」「でも、どうして飲んだの？ 茶柱を」「母さんのお腹に入れておけば安心なもの」「母さん！ まだ話してもいい？」「うん」と言って親子の話が続いた。「満州で、ソ連兵に襲われたとき、昭子の骨がばら撒かれたのを知っている？」「うん」。私はさらに言葉を続けた。「母さんが仕事から帰って来ると、家の中はソ連兵の荒らした後でめちゃめちゃだった。母さんは、床下に散らばっていた昭子の骨を一つ一つ拾っては、ポケットに入

れていた。そのとき母さんが何か口に入れたので僕が聞くと、母さんはポケットから今拾ったばかりの昭子の骨を取り出して、僕に見せた。あれは昭ちゃんの骨だったのだろう。本当に食べちゃったの？ どうして」と、思っていたことをしゃべった。暴民に襲われたときも、八路军に襲われたときも、そしてソ連兵に襲われたときも、その度に骨箱は逆さにされ、中に入っている骨はばら撒かれてしまった。母は、やっと重たい口を開いて「昭子の骨を日本まで持って帰れないかもしれないと思ったのだよ。お腹に入れておけば安心だものね。一緒に内地に帰れるかもしれないからね」と言った。「茶柱とか骨とかの話を父さんにしたら、嫌な顔をしたのを知っている。だがあとで父さんは、『身を切られるような思いだった』と言って、『だから母さんには、関東軍もかわらないよ』とも言っていたよ」と、打ち明け話をした。母は、「ところで満彦はどう思う。母さんのしたことをさ」と穏やかな口調で語り掛けたの

で、私は「彦っぺは母さんの子で本当によかったよ。母さん！彦っぺを生んでくれて本当にありがとう」と、今まで言いそびれていたことを心を込めて言った。

翌朝、私と節子とが付き添いの交代で顔をそらえたときに、母は二人に見守られて静かに死んでいた。享年六十九歳だった。

私は、母の手を握って「満州婦りがまだ二人生き残っているよ。おれはやるぞ！母さんの子だもん。おれは彦っぺなんだ」と言ったが、涙がとめどもなく流れていた。

○息たえて 草にうもれし 幼子の

赤い靴まで 白い骨のび (満彦)

○満州の 荒野に群れる 犬の声

草場に散らす 赤い靴服 (満彦)